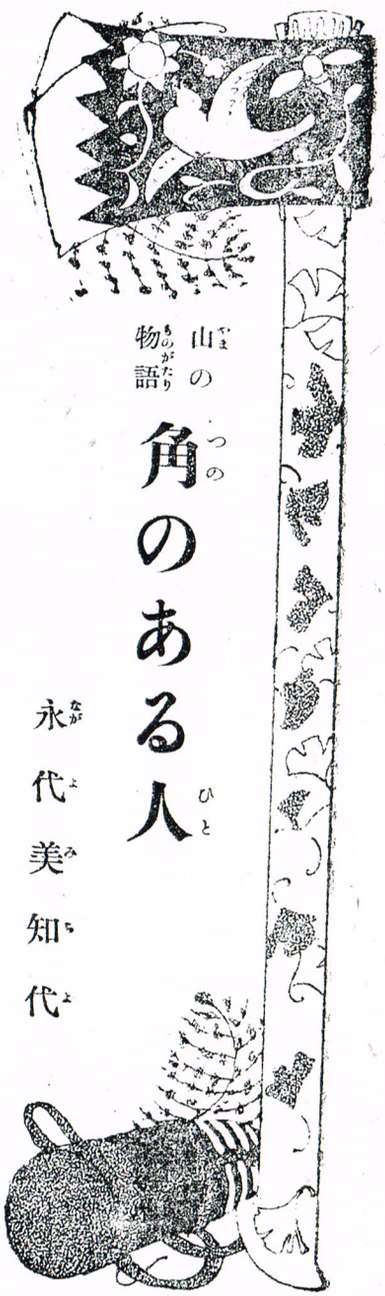

山の物語

角のある人

永代美知代

▲一▼

高峰百合子が母様をせびつて、無理にこの中房温泉に出かけて來たには、いろ〳〵深い意味があつた。信州中房は有明山の麓にあつて、日本アルプスの關門とでも云はうか、海拔五千何百尺の高地にある温泉である。そこから尾根傳ひに上高地へ出れば、鎗が嶽へは僅かに二日路か三日路で行きつける。それから何處でもアルプス連山の山登りには、持つて來いの足だまりである。

勿論、高峰百合子はまだやつと十二歳の少女なので、アルプス登山などと、そんな大それた企を持つて居る譯ではないけれども、中房からすぐ上の山の燕嶽には、父博士の研究所があつて、お父様は夏のはじめから、天文氣象研究の目的を以て、三四人の助手と一緒に、そこへ行つて居られる。

毎年夏の休みには、定つて出掛ける筈の避暑旅行に、同じ事なら父様の在らゐる近くに行つて、もし都合がよかつたら、お轉婆さんと呼ばれてもかまはないから、燕に登つて父様を驚ろかせよう、父様はきつと吃驚しておしまひなさる、けれどもどんなにお喜びなさるだらう？

『おゝ百合子！』

父様は定つて斯うお叫びなさるに相違ない——百合子はこんな風な考から、はるばるこの中房温泉に出掛けたのであつた。

けれども、百合子は失望しないではゐられなかつた。中房温泉は涼しいには涼しく、蚊は居ないし、東京に比べると極樂だ。併し、輕便鐵道を下りて有明驛から温泉までの山道六里が、あまりに嶮しかつた、ひどかつた。母様も百合子も、半分は人夫の脊に負されて、えんやらやつとやつて來た。

こゝから燕嶽に登つて來るには、往復四里は大丈夫ある。

『母様、私お父様の許へ行きたいわ、ねえ母様、今日行つて、その明日はすぐ歸つて來ますから、ね、可いでせう？』

二三日して疲れがなほると直ぐ、百合子は斯うお願ひするのであつた。併し母様は、飛んでもないと云はんばかりに、頭をお振りなすつた。

『百合ちやんはまあ！そんなあなた、女なんぞの行ける處ではありません。』

仕方なしに百合子は、朝に晩にそれらしい山を望み見ようとした。前に聳えて見えるのが有明山の裏山で、燕嶽はすぐ後の山を登つて行けば可いのださうな、而もどういふ譯か、その山の姿は少しだつて見えないのである。

『行きたいよ私。』百合子はぢれ切つた。

三日目四日目と間をおいては、宿から父博士の研究所へ人夫を出した。麓から頂上までの間、一滴の水さへ湧かない燕の研究所では、先づ第一に、人夫を使つて飲料水を持つて來させなければならなかつた。それから米、鑵詰と云つた風な食糧品一切を運んで、人夫は二人三人と一しよに通つて行くのであつた。

『お孃様、お父様に何か御用はございませんか。明

日は人夫をやりますから、お母様にさう仰有つてください。』

廊下で逢つた宿の主人から、斯う聞かされた百合子は、大急ぎで部屋へ歸つた。

『母様、明日父様の處へ人夫が出ますつて。』

『それは大變だ、いろいろお屆け物がありますから、兎に角人夫を此處へよこして貰ひませう。』

母様が人夫を呼んで、東京から持つて來た珍らしい食料品などを預けていらつしやる間に、百合子は何が何でも、自分も

一緒に連れて行つて貰ひませうと決心してしまつた。そして、思ひ切つて人夫の一人に談判するのであつた。

『私も一緒に連れて行つて頂戴な。』

『お嬢サアも行ぐかね、歩めない處は。俺負つてあげるだ。』

人夫は本氣で答へた。

『ホホホホ、こんな大きな子供を負つて山が登れるものですか。百合子さん冗戯ですよ。』

母様が仰有るとまた他の人夫が、

『うそでねえもんだ、奥

サア、御安心なせいまし、俺ん等二十貫上の荷物をかついで、平氣でございすに、お嬢サアお登りなせいまし、燕はハイ綺麗なお山でございす。』

と、眞顔で答へた。百合子は

『母様、ね、母様、後生です、決して危いことはありませんから、ねえ母様。』

と、熱心に賴んだ。母様も終ひには根氣まけして、百合子の燕登山は許された。

翌朝三時半、まだやつと東の空が白々と明けそめた頃から、百合子は人夫と連れ立つて山路を登りはじめた。はじめの程は胸突くやうな山阪に熊笹の一杯生ひ茂つた邊を行く間の息苦しさ、こんな事ではとても駄目だと悲しくもなつた。併し、その内にだん〳〵馴れて來て、百合子はふしぎなほど身輕に辿ることが出來た。云ふまでもない、父博士に逢ひたい一心から、元氣も一倍出たに相違ない。その上、森林帶から寒木帶、お花畑といつた風に、山には自然の面白い變化があつた。

『お嬢サア今一息だ、この坂を突切ると、頂上まへイ五六町でごせいます。』

百合子は最後の勇氣を全身に集めて、眞先きに驅け登つた。

『アラ！』と百合子は、思はず知らず感嘆の聲を擧げた。前面の景色はまるでパノラマそつくり、削つたやうな峰が空高く聳り立つたのは鎗が獄か。赤い黄色い、高い高い山が、次ぎから次ぎへと屏風のやうに立て廻はされてある。

『赤いのが赤獄、黄色いのが硫黄獄、それから此方のが大天井。』

と、人夫は叮嚀に指し示して教へてくれる。百合子はたゞもう雄大な景色にみとれて、そのまゝ其處へ突立つた。すると、いつのまにか父博士がそこに來て、

『おゝ百合子！』

と、突然に抱き寄せられた。驚ろいた百合子は、更にまた驚ろいた。

『お父様！お父様！』

百合子は何にも云へなくなつて、涙ばかりが譯もなく流れて落ちた。父様はおちついた態度で、

『兎に角小舍へ來い、小舍でゆつくり休むがよい。』

と仰つしやる。

見ると、一町ばかり彼方の岩蔭にテントが張られてあつた。父博士は先きに立つて歩きながら、大きな聲で呼ばはつた。

『諸君、百合が來たぞ、百合が來たぞ。』

『水が來た、それは有難い！』

『ゆり』と『みづ』とを聞き違へて出て來た助手達の目に、思ひ掛けもない百合子の姿が見えた時、一同は驚ろきの眼をみはつた、そして手を打つて離し立てた。

『百合さん萬歳よく來て呉れましたねえ。』

助手は皆平生から百合子と大仲よしの大學生ばかりなので、百合子は一同から大騒ぎして歡迎された。

『お茶をいれませう、ねえ百合さん。』

學生たちは這ひ松の枯木を拾つて來て、火を燃すやら、お湯を煮立てるやら、山獨活を掘つて來てお汁を煮るなど、百合子のために御馳走が造られた。

『今に雷鳥を捕つて燒いてあげませうね。』

『雷鳥つて、どんな鳥？』

『綺麗な可愛い、鳩よりかちつと小さな鳥です、午後になつて山へ霧がかゝると出て來ますよ。』

『私その鳥の飛んでる處見たいわ。』

『では、後で御一緒に行つて御覽。』

父博士は百合子の嬉しげな顔を見ながら、滿足らしく云ふのであつた。

夕方、百合子は三人の助手と共に頂上まで登つて見た。小舍からほんの三四町の、おまけに花崗石のこまかくなつた綺麗な砂路で、その處々に眞紅な淡紅な、何とも云へぬあざやかな色の駒草が、その名の如く小さな若駒の顔のやうな形に、咲き匂ふて居るのであつた。

『まあ、これが駒草、綺麗な花だわねえ。』

百合子は夢中になつて探し歩いた。

『百合さん、傾斜が甚いから危いですよ。』

と云ひながら、助手達も一緒になつて駒草をさがしては摘んだ。

『めつけた。』

『めつけた。』

暫らく此處でも其處でも無邪氣な聲が聞えてゐたが、ふと、たゞならぬ物の響がしたと思ふと同時に助手の一人が大聲で叫んだ。

『大變だ、大變だ、百合さんが、百合さんが谷へ落こちた！』

（つゞく）

＊　＊　＊　＊

深い谷底へおちた百合子は、氣絶して死んだでせうか。いや、死にはしますまい。併し、幸ひに生きてゐても、どうして上つて來るか。谷底でまごゝしてゐる中に、また危いことが起りはしないでせうか。――このお話は、次號でますゝ面白くなります。